赤ちゃんのおもり

昭和五十八年度　六年男児

「やだで、おしんじゃあるまいし。」と言うのが、ぼくの口ぐせになりました。六年生にもなって、男の子が赤ちゃんをおんぶしているなんて、友達に見られるとかっこ悪いと思うからです。家の中で、あやしていてもだれかに見られているような気がします。赤ちゃんが、泣き出すとなかなか泣きやまないので、あやすのがとても大変です。家では泣きやまないし、外に出ればなおさらのことです。今日も泣いている赤ちゃんを

「おんぶしてみっが。」とおんぶひもといっしょによこしました。その日もだいたりしたり、おもしろい顔をしてもなかなか泣きやまなかったので、ついにぼくの所によこしたのです。そして、「男のおしんみでいだの。」と笑いながら言ったので、自分が、女の子のように見えたのだと思うととてもはずかしくなりました。しばらくしてから、お母さんと代わったら、かたやこしが痛くなり、その痛さはまるで、十キロのお米を何百こも運んだときのようでした。

「明治　大正のころは、赤ちゃんをおぶって学校に行った人が、いたんだよのお。」とぼくが、真人の顔を見ながら、話かけるとお母さんは、自分のことのように「昔は、大変だったのよ。」と言いました。

「イナイ、イナイ、バー。」すると、たたみの上にねかされている真人は、くすくす笑ったようでしたが　まだ大笑いはしません。気げんの良い時は、すぐにも笑うのですが、気げんの悪い時は、どんなにあやしても笑ってくれません。その日は、あまり、昼寝をしなかったし、そのうえ、机の上で遊んでいた時、足をふみはずして、落ちたのでとても気げんが悪かったのです。いつも、お母さんは、どんなに赤ちゃんの気げんが悪くても泣かせないでじょうずにあやすので、さすが、お母さんだなあと思います。たいていは、ぼくがあやしてもだめですがたまに泣きやむ時もあります。

「吉春、あやし方じょうずになたの。」とお母さんがほめてくれます。すると自分でも成功したという気持ちになって泣きやませてやろうと思います。ぼくは、真人がまだ生まれていない前は、静かで、そうさわがしくはなかったけれど、真人が生まれてからは、家の中が明るくなったけれど、さわがしくなったような気がします。

「ただいま。」と弟の公彦が、片手に何か特って入って来

ました。公彦は、真人をだいたり、おぶったりするのは、まるでだめなのですが、真人の言っていることや何をしたらいいか、わかるので、あまり泣かせないですむことがあるのです。

公彦が郵便物を持ってきました。それは、ぼくが五年生の時、真人とお母さんが三ケ月、入院した山形大学医学部附ぞく病院から送られてきた封書です。中身は、赤ちゃんのことについての小冊子でした。ぼくもお母さんから、借りて読んでみたら「お風呂の入れ方やあやし方などが書いてありました。ぼくは、その中の一つをやってみようと思って、小冊子に書いてあるとおりにしました。馬のように四つんばいになって、背中に真人を乗せて歩いてみました。そうしたら、今まで、気げんが悪くて笑わなかった真人が笑い出しました。ぼくと公彦は「なるほど、この小冊子には、本当のことが書いてあるみでいだの。」と顔を見合せながら言いました。

「今までこういうことあったの初めてだの。」とお母さんは、とてもおどろいていました。

「これから、夕飯のしたぐすっから、真人のめんどうちゃんとみでれの。」と言いながら、ぼくに真人をわたしました。それから、ぼくは、小冊子に書いてあることを何回もやってみましたが、やっぱり笑いました。公彦は「山形大学医学部の人たら、アンケートか何かで調べだんがなあ。」とまだ不思議そうな顔をして言いました。

しばらくするとお父さんが、会社から帰って来ました。お母さんは、今までぼくが真人をあやしたことや小冊子のことでおどろいたことをみんな話していました。

「吉春、公彦、将来きっと役立つから、覚えどげの。」とお父さんは、しんけんな顔で言いました。もしお父さんの言うことが、本当ならば、今までの口ぐせをなおして逆に進んで真人のめんどうをみなければなりません。

ぼくは、これからも真人が、歩けるようになるまで、泣かせないようにあやしたり、おしんみたいにおんぶしなければなりませんが、今までより、上手にあやせるようになりたいと思います。